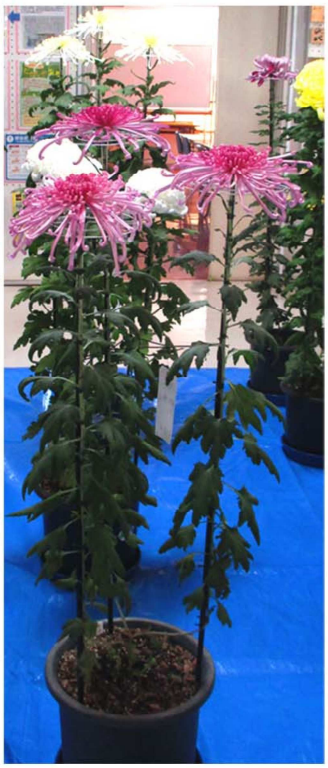
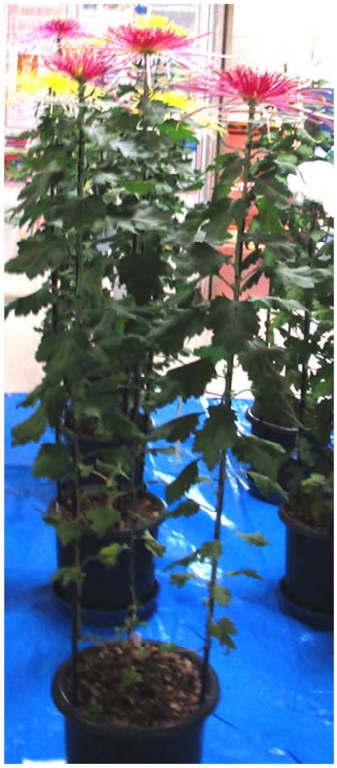
菊花展（寒川町菊花会）

11月1日（火）～4日（金）寒川町民センター
盆養三本、ダルマ、福助、切り花などの展示



盆養の部
太管（ふとくだ）
細管（ほそくだ）
間管（あいだくだ）

切り花



菊花展（寒川町菊花会）

11月1日（火）～4日（金）寒川町民センター

管物

出品者

水島　進

藤好　清晴

後藤　勤

松原　不二男

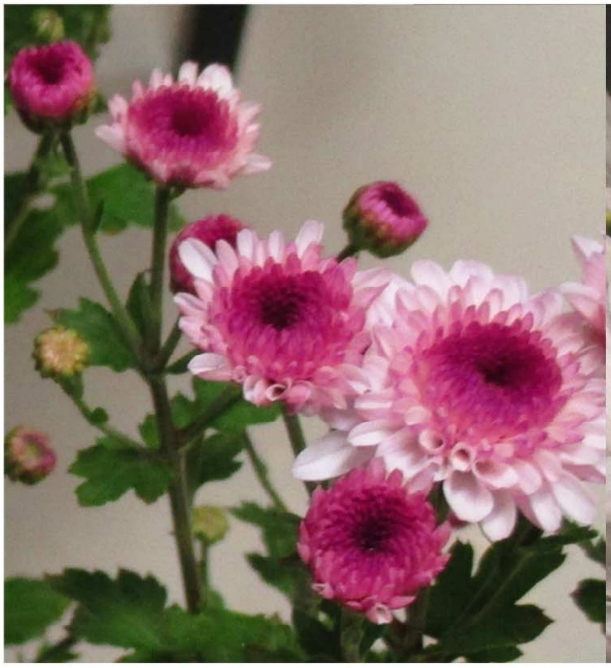
福岡　堅

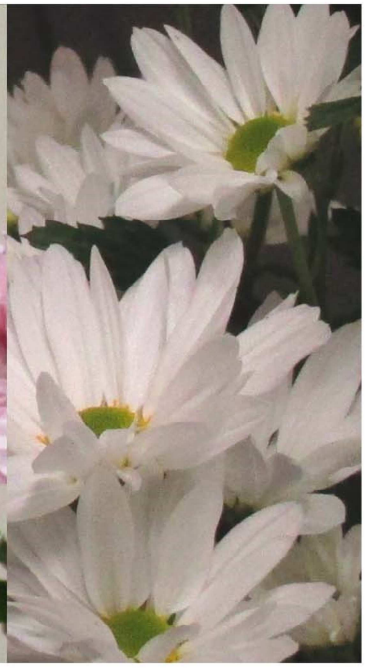
石黒　清

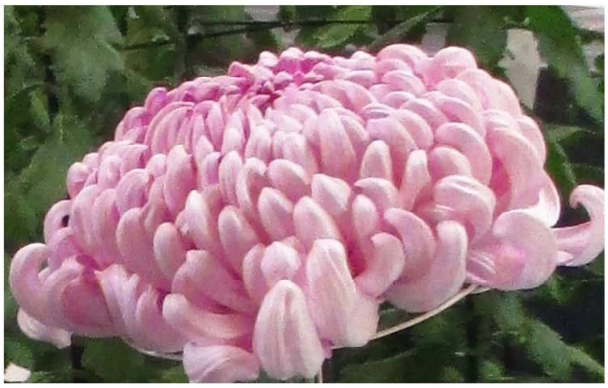
菊花展（寒川町菊花会）

11月1日（火）～4日（金）寒川町民センター

スプレー菊、ダルマ、福助、太管







寒川茶道同好会

呈茶席 11月３日（木）寒川町民センター

天気に恵まれ、来客も多く、特に若い人の参加が目立ち、良かったと思います。

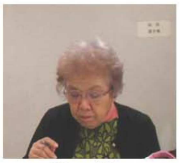
黄味しぐれ（菓子）

寒川茶道同好会

呈茶席（煎茶） 11月3日（木）寒川町民センター

道具や茶室に拘らず、自由な精神や風流に趣をおきます、日常のお茶をより美味しくいただければ・・・と思います。

野ばら文化会　2022年度「短歌」作品


徳江 道子

土屋 トミ子

小林 篤子

亀山 文子

稲垣 武子

杉本 照代先生

新しき年の大空深ぶかと澄み徹れるに双手を合す　杉本 照代

今し昇る令和五年の初日の出自づ頭を垂れ吾の拝む　杉本 照代

ぴょんぴょんと跳ねて前ゆくうさぎさん亀の歩みに吾の道を　杉本 照代

秋海棠うつむく花のやさしさよ吾(あ)がさ庭辺(にわ)につつましく咲く　杉本 照代

地に低き風のあるらし咲き残る秋海棠の花をゆらせる　杉本 照代

はらり落つ秋海棠の終の花朝つゆふふむを吾はいとほしむ　杉本 照代

寒中にさきがけて咲く蠟梅の強き命よ気高き香り　稲垣 武子

うつむきて何を悩むか白い花春に咲きたるクリスマスローズ　稲垣 武子

紫陽花の色採りさまざま咲き競うやがて一色人の世思う　稲垣 武子

垣根ごしひっそり咲きたる半化粧教えくれたる亡き人思う　稲垣 武子

あでやかな春の花にも勝るとも桜もみじの赤黄に染まる　稲垣 武子

我の歌を読みくれし方に招かれて心うちとけ話すよろこび　亀山 文子

裾野までくっきり見える雄大な真白き富士に初日輝く　亀山 文子

父母のもと二十余年の日常に得しこと今も心に生きる　亀山 文子

家事農事未熟なる吾を夫義父母の導きくれての今の吾なる　亀山 文子

神殿で心静かに神職の言葉を受け心身清き　亀山 文子

大雨が呼んでくれたか雲間より七色光る大きな橋を　小林 篤子

元旦に晴天衝いて富士の山でんと構えて我らを鎮る　小林 篤子

枯草の下より出でる「リュウキンカ」黄の花艶やか春を呼ぶな　小林 篤子

日だまりに笑顔いっぱいパンジーも凍てつく朝に身をちじませて　小林 篤子

草むらにひょっと顔出しこうろぎは羽根を広げて涼風待つかな　小林 篤子

富士山の夕暮れ時は太陽が輝き隠れ後光のようだ　土屋 トミ子

雀達落ち穂めざして田んぼへと親子の雀我が庭にはこず　土屋 トミ子

るり色の羽きらめかせカワセミの飛ぶ美しさに見ほれていたる　土屋 トミ子

孫颯太田んぼの中にザリガニを見つけ声あげ大喜びす　土屋 トミ子

土手の花朝の散歩のさわやかにコロナ禍なれど笑顔を交わす　土屋 トミ子

日溜りに寒さこらえて福寿草芽吹き初むを日毎楽しむ　徳江 道子

落葉した桜並木が静かなり細い光を背に散歩する　徳江 道子

裏の路地白つめ草の根っこ延び取っ手も引いても吾と根競べ　徳江 道子

泣きそうな灰色雲が重なれり空より雪のちらちらと舞う　徳江 道子

目がさめて窓越しに見る池の鯉朝日に光る湯煙の宿　徳江 道子

野ばら文化会　2022年度「短歌」作品

二宮 昭雄

平野 良三

清水 洋一

宮治 友美恵枝

山根 喜美代

外灯に淡く浮き立つ紅白の梅の香れる花の下に行く　山根 喜美代

もう一度旅がしたいと言いおりし母その年となり身にしみており　山根 喜美代

上達は望めなけれどこつこつとたゆまず進むサークルの幾つ　山根 喜美代

亦ひとつ増えてしまった出来ない事思いで箱は膨らむばかり　山根 喜美代

もろもろの悲しい事のありし夜甘口の酒一人グラスに　山根 喜美代

水平線ゆったり昇る満月のあまりの大きさ声上げ眺む　宮治 友美枝

しゃぶしゃぶのわかめの緑鮮やかに春を先取り今宵の夕餉　宮治 友美枝

里芋の広葉にゆらぐ露の玉朝日にゆらりゆらりと光る　宮治 友美枝

半日の命なれこそ愛しけれ沖縄芙蓉の紫の花　宮治 友美枝

空と雲鮮やかに燃え日が昇る今日一日の安泰願う　宮治 友美枝

憂きことのさらに積もりて年の暮れ雲ひとつなき空のともしき　清水 洋一

手びねり急須の小穴香り立ち小さな秋の訪れを知る　清水 洋一

今年また孤独の庭に射す初陽ただ有り難く合わす両の手　清水 洋一

酔いざめの卓にポツンと次郎柿剝く人なくて白湯を呑みほす　清水 洋一

重き足かばいて歩くアスファルト枯れ葉ころころまつわりて過ぐ　清水 洋一

何時にも増し雄々しく見ゆる初富士よ師走に孫の男子（おのこ）産まれし　平野 良三

大雪のわがふるさとを嘆きつつ此処に住み居しを幸せと思う　平野 良三

吾が勤務する「特養」のコロナ クラスターは終息するも世間は未だし　平野 良三

小田原から寒川町へ転籍せし心もようやく「寒川」となりぬ　平野 良三

「核」の使用を仄めかし折る牧師らに
「君らこそサタン！」と愛を問いたき　平野 良三

あざやかなオレンジ色の君子欄咲くにしみじみ亡き妻偲ぶ　二宮 昭雄

仲秋の空にほほ笑む満月よ十五夜だんごにコロナ忘るる　二宮 昭雄

収穫を夢見てカボチャの種子をまく雪に負けじと二葉の出ずる　二宮 昭雄

豊岡の郷に羽ばたくコウノトリ幸せ運ぶ夢をはぐくむ　二宮 昭雄

この五月八甲田山へ旅したる残雪踏めばひざ埋る　二宮 昭雄

野ばら文化会 2022年度「詩」 作品集

犯人は誰だ

稲垣　武子

暑さ寒さも彼岸まで
冷たい秋風が身にしみる
ところが翌日猛暑がぶり返る
体がついていけない
昼下りテレビを見ながら
うと、うと、うと
ドラマは終わっていた
犯人は誰だったんだろう

年賀状

亀山　文子

五年生の時
音楽を教わった
よし子先生
女学校を卒業しての
初々しさが皆から好かれた
昨年の正月はなつかしい声で
『賀状が戻って来てしまったの』…。と
今年の賀状には
「これで最後にします」…。
悲しいけれど六十余年
毛筆で「文ちゃん」書き出し
卒寿を過ぎても賀状を下さり
本当に有難うございました
いつまでもお元気で…と心から祈りたい
最後の一枚は私の宝物
いつまでも大切にして置きたい

菜の花

小林　篤子

小出川の河川敷を散歩する
曇一つなく青空の下
菜の花の黄色が眩しい
萌木色の葉っぱと黄色の花
鮮やかな色彩
私の心に光が広がる
冬から春へと希望を抱かせる
冬の厳しさも希望へ変える橋渡し
今年は特に愛おしい　小出川の菜の花

散歩中の会話

土屋トミ子

おはよう　休みになると
遊びにやってくる三才颯太
午前中はプラレール・ミニカーで
東名高速東京方面へ
午後は散歩　カエル・バッタ・カマキリ等
道にひかれ死んでいる
かわいそうねと草の中へ
「ばあちゃん　ぼく大きくなったら
助けてあげられる様に勉強がんばるね」
散歩中の会話
優しい心が育っている
温かい気持ちが胸にこみ上げる

河津桜

徳江　道子

二月の終り河津桜の花見
寒さも和らぎ花見日和
車の旅着いたら
会場近くは車と人の渦
花は満開
川沿いは濃い桃色一色
愛らしい花房
手を出すと微笑むような・・・
長い桜並木満喫

土手の片側は露店が並ぶ
土地がら魚を焼く匂い
サンマの丸干し　小鰺の干物
試食　どれも美味しい
柑橘類色とりどり

お昼はリッチに豪華海鮮丼（あわび・さざえ入り）
人波の中露店を覗き
楽しみながらお土産を物色

春先取の花見旅
心安らぐ河津桜

野ばら文化会 2022年度「詩」 作品集

三澤 芳彦先生

新茶

宮治 友美枝

毎年四月末日　静岡の弟から
川根産の新茶が届く
子どもの頃から飲み慣れた味
楽しみにしている

ペットボトルの水を使う
沸かし　湯冷ましの器に
お茶の葉は少し多めに急須へ
湯気が少し弱くなったら
急須に移し　二分弱

茶葉の広がりを待つ
この時間が待ち遠しい
急須から湯呑に
二、三滴　一滴また一滴
最後の一滴まで絞る

まず亡夫に
新茶独特の香と味
甘くてまろやか　実に美味
しばらく楽しめる
弟に感謝感謝

落葉

山根 喜美代

うす日さす小径
くるくると木の葉がとび交う
赤・黄・朱・一枚一枚の
自然の織りなす美しさ
ひらひらと舞い落ちる葉
燃えるような紅の色に
晩秋のさみしさが残る
かさかさと小さな音を立て
色づきを失いつつ
足元にからみつく落葉
ゆく秋を惜しみ
冬の訪れを知る

モジズリ

清水 洋一

緑の芝生に
自分の花を咲かそう
拗(おさ)ねる支えのないままに
捩れて空へ真っ直ぐに
淡いピンクの色付けて
螺旋階段のぼります

甘い言葉の約束を
夢の夢のものがたり

花の命は短くてー
纏(まと)わりついてくるもの
物議を醸すものたちは
情に無縁　闇だけが世に瀰漫する
巷を揺するは風ばかり

晩秋に思う

三澤　芳彦先生

錦秋の山は美しい
さっと吹き抜ける風
はらはらと木の葉を散らす
どこからとなく漂う菊の香
何とも口マンチックな季節
また同時に憂鬱な季節
喪中はがきが届き始め
秋の深まりとともに数を増す
若いときは祖父母が
やがて父母が
そして親しかった本人の逝去
年を追うごとに多くなる
施設に入所し年賀状はご遠慮
それも心が痛む
ワールドカップを観ていて思う
自分の人生　ゲームセットはいつか
三十年　二十年　十年先か　明日か
妻が欠席のはがきを出すのか
私が妻の喪中はがきを出すのか
今どんなに元気でも
いつか絶対来る
延長の前半戦があり
アディショナルタイムの長いことを信じ
今日を大事に生きよう